



キャンパス／東京都渋谷区、日野市 学生数／4,769人
設置者／学校法人実践女子学園 創立／1899年(1949年大学設置)
建学の精神／女性が社会を変える、世界を変える
学部／文、人間社会、国際、食科学、環境デザイン、生活科学
大学院／文学、人間社会、生活科学

「選ばれ続ける大学」に向けた重点施策

項目	第一次大学グランドデザイン期(2013年～2025年)	第二次大学グランドデザイン期(2026年～)
教育上の「強み」	グローバル化と社会連携を教育の2本柱に ▶ 学びのフィールドを教室からキャンパスの外へ拡大し、地域社会や国際社会へ展開できるよう、教育課程やプラットフォームの体制・環境を整備(企業等と課題解決に取り組む「社会連携プログラム」の拡充、クォーター制の導入など) ▶ 社会連携の加速を目的とした社会連携推進室の設置 ▶ 学生支援制度「J-TAS*2」による学生の成長支援、キャリア支援	これまでに芽吹いた「種」を発展させる ▶ 社会連携・グローバル化・キャリア支援等の取り組みで芽吹いた「種」を組み合わせ、発展させるフェーズとする ▶ 「未来のために自ら社会や世界をより良くしようとするマインドを育む教育」の推進 ▶ 国内外の社会と連携した学生が挑戦したくなる共創型のプログラムの提供 ▶ 世界の課題に挑戦する国内外でのグローバルプログラムの充実と提供
学部学科・キャンパス整備	学部学科を改組し、教育力を強化 ▶ 文学部、生活科学部、人間社会学部の3学部、国際学部(2024年4月新設)、環境デザイン学部(2025年4月開設、生活科学部生活環境学科を改組)を加え、各学部が独自性を持って教育を柔軟に展開できる体制を整備	渋谷に学部を集約し教育力をさらに高める ▶ 2026年4月に食科学部を開設(生活科学部食生活科学科を再編) ▶ 2031年をめどに全学部・学科を渋谷キャンパスに集約する計画を決定。最先端の企業や文化が集積し、豊かな国際性を持つ渋谷の立地を生かした教育を進めるため、渋谷キャンパスの再整備に着手
入試	受験生が強みを生かせる選抜方式を整備 ▶ 受験生自身が自分の強みを生かせる入試を選択できるよう、2025年度入試から、学部・学科ごとに独自の方式を採用していた総合型選抜の方式を、4つに整理(「総合評価方式」「探究学習・プレゼンテーション方式」「高校時代活動アピール方式」「基礎学力試験方式」)。筆記試験が得意な受験生、プレゼンテーションが得意な受験生など、多様な受験生の特性に対応した	

*大学資料、取材を基にBetween編集部にて作成。

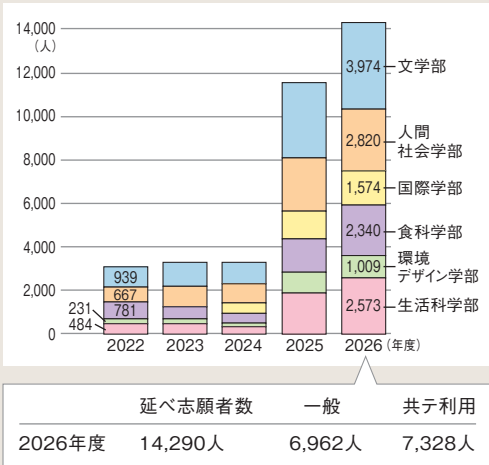
注目! 18歳対象から一步抜け出し 学びの対象を社会へ広げる新戦略

実践女子大学は、2025年度、2026年度入試において、女子大学として全国最多の志願者数*1を記録した。実志願者数もこの2年間で160%以上に増加している。その背景として、総合型選抜を4方式に体系化し、受験生が「自分に合った方式」を選びやすかったことや、併願可能な方式を導入したことが挙げられる。また、広報において社会連携の実績数や学生の具体的な活動例を積極的に発信した点も、志願者増につながったと考えられている。

一方で、大学が18歳のみを対象とする教育モデルは終わりつつあると、難波学長は言う。「社会人のリスクリング需要が高まっている。学位取得を前提とせず、学びたい人が学べる環境を整えたい。その観点から、マイクロクレデンシャルに注目している」と語る。同大学では、ソーシャル・アントレプレナーシップ系の4科目を修了すると1つのバッジを付与するパッケージを提供している。「本学の強みである源氏物語研究をオンデマンド化し、海外に提供することも可能だ。多様な学びを提供し、大学を新たなステージへと発展させたい」(難波学長)。

延べ志願者数の学部ごとの推移(過去5年間)

※一般選抜・共通テスト利用選抜



*2 J-TAS(ジェイタス:Jissen Total Advanced Support)。「成長診断テスト」「学修ルーブリック」「自己成長記録書」「授業」「課外活動」「担任教員・学生生活支援スタッフ・キャリアアドバイザー」「個別サポート」の7つの要素を軸とした学生支援。

皆で策定したグランドデザインを礎に、 時代とともに進化し続ける

CASE
STUDY

実践女子大学

女子大学全体の志願者数が減少傾向にある中、2年連続で女子大学最多の志願者*1を集めた実践女子大学。改革を重ね、「選ばれる大学」となった同大学の取り組みを学長に聞く。



学長
難波 雅紀

なんばまさのり●1983年学習院大学文学部英米文学科卒業。1988年上智大学大学院文学研究科英米文学専攻博士前期課程修了。1997年実践女子大学文学部英文学科助教授、2003年教授。文学部長、副学長を経て、2021年より現職。

社会連携とグローバル化を 教育の軸に

18歳人口の減少が進み、共学化や経営統合を選択する女子大学がある中でも、本学は女子大学として歩み続ける道を選んでいきます。それは、「女性が社会を変える、世界を変える」という建学の精神を守り続けていくためです。一方で、厳しい環境下で大学がさらに発展していくためには、「ここでなければ学べない」と言える教育の軸を持つことが不可欠です。

本学の近年の歩みの起点となっているのは、2015年に掲げた「第一次大学グランドデザイン」です。策定にあたっては、「10年後にどのような大学であるべきか」という根本的な議論を、執行部だけでなく若手・中堅の教職員、本学園の中高の教員、卒業生も参画し、約1年半にわたって重ね

した。この中で定めた教育の軸が、「社会連携の推進」と「グローバル化の推進」です。

社会連携については、現在、年間210に及ぶプログラムを展開し、延べ8000人もの学生が参加しています。企業との商品開発やマーケティング提案、自治体と連携した地域活性化プロジェクトなどがあり、学生は相手先との打ち合わせや現地調査、プレゼンなどを経験し、課題発見・解決力を身に付けます。これらは、社会でどのように力を発揮できるのかを実践的に学ぶ場となっています。

グローバル化においては、語学留学・海外インターンシップ・国際貢献の3フェーズに応じたプログラムを体系的に整備しました。社会連携プログラムと併せて、留学やインターンシップへの参加を促進するため、クォーター制を全学的に導入しています。

2024年度からは、3年連続で学部新設・改組を行いました。これは専門教育を柔軟に展開することに加え、外部から見ても「何が学べる学部か」をわかりやすくするための改革です。こうした数々の施策を混乱なく進められたのは、グランドデザイン策定を通じて本学のめざす姿が教職員に共有されたためだと考えています。

社会に開かれた教育を实践、 学びで選ばれる大学へ

本学は、近年、女子大学として全国1位の志願者数を2年連続で達成し、実志願者数も伸ばしました。学部・学科ごとに独自の方式を採用していた総合型選抜を見直し、基礎学力や探究学習の実績など、受験生が自らの強みを生かせる入試に変えたことも背景にあるでしょう。ただし、それだけが理由ではありません。連続した学部学科の再編や、社会連携プログラムなどで活躍する先輩たちの姿を積極的に発信してきたことなど、さまざまな要素が複合的に作用した結果です。「偏差値ではなく、何を学び、どう成長できるかで選ばれる大学」へと変化してきたことの表れだと捉えています。

現在、本学は「第二次大学グランドデザイン」のもと、社会課題に主体的に関わる人材の育成をめざしています。その一環として、2031年4月をめどに日野市にある3学部を渋谷キャンパスに集約する計画です。国際都市であり、多くの企業が集積する渋谷を拠点とすることで、これまで以上に社会に開かれた教育を実践し、本学の存在意義をより明確に示していきたいと考えています。

*1 大学通信調べ。4/7現在集計分(主要な私立大学約100校を調査、一般選抜・共通テスト利用選抜のみのデータ。2部・夜間主コース等を含む)

取材・文／本間学 撮影／木藤富士夫